

県北

どらくろあ

第33号 2018年12月1日（毎月1日発行）

県北群星伝⑮ スターの輝きを演出

坂井智明 ともあき 59歳（庄原市七塚町出身）



展覧会場の特設撮影セットにて

坂井智明さんは、日本の広告・音楽業界の最前線で活躍しているアートディレクターだ。出身校である庄原格致高校の平成30年度同窓会（11月3日・庄原グランドホテル）で、記念講演をするために帰省。せっかくだから展覧会をしたらどうだという同級生の勧めがあって、庄原市役所ロビーで「MUSIC&PLAY Y」スター達の歌声☆展」

（11月4〜7日）を開催した。おもに音楽・演劇を中心としたポスター、パンフレット、CDやレコードのジャケット、書籍の装丁などの「作品」を展示。美輪明宏、美空ひばり、南野陽子、中山美穂、原田知世、内田有紀、久保田利伸、近藤真彦、中村紘子…、まさにスター博覧会である。仕事の合間に坂井さんがスターたちと談笑するスナップ写真も紹介

されている。アートディレクターは広告現場の指揮官だ。クライアーン（広告主）の依頼を受けて、グラフィックデザイナー、カメラマン、コピーライター、スタイリスト、イラストレーター等の専門家を束ねて、効果的な宣伝媒体を作成する。経験とセンスが要求され、すぐに結果が出る厳しい世界だ。坂井さんが絵画に興味を持ったのは中学生のとき。庄原中学校、格致高校では美術部に所属。卒業後は、御茶ノ水にある東京デザイナー学院に通った。入学当初は臨時の教室を他校に用意するほど多かった新生入生も、厳しい授業についていけずに退学する者が続出。とくに、夏休みを境に、課題を提出することができずに生徒数は激減した。専門学校の二年間で、プロとしての覚悟と能力が試されたのだ。

デザイン学校卒業後、二十歳で就職。大手広告代理店の制作会社などで広告業界の現場のノウハウをみっちり叩き込まれた。残業時間が月に百時間を超えていたという過酷な職場だった。二十四歳のときにCBS・ソニー（現ソニー・ミュージックエンタテインメント）に入社。CBS・ソニーではデザイン部のクリエイティブルームに配属され、音楽関係のデザインを本格的に手掛けるようになる。

最初に担当したミュージシャンが、織田哲郎、南佳孝のLPレコードと坂上忍のポスターだった。同期入社は坂井さんを含めて三人だけ。即戦力として、実力を認められての採用だった。八年間の在籍中に、人気アイドルからクラシック、洋楽、民謡までオールジャンルのレコードジャケットを制作。デザイナーにとってレコードジャケットは、今も憧れのデザインジャンルなのだという。



「黒蜥蜴」(2013年)
舞台用パンフレット

た。そのデザインを気に入った美輪さんの逆指名で、その後の美輪さんの著作、コンサートや演劇のポスター、パンフレット、携帯サイトなどのデザインすべてを任せられることになって今年で二十七年になる。来年も寺山修司作「毛皮のマリー」の舞台ポスターを製作する。

「美術部時代の坂井さんは、どんな部員でしたか？」

市役所ロビーの展覧会を手伝っていた赤堀由美子（旧姓三宅）さんに尋ねた。赤堀さんは、坂井さんが格致高校の美術部に入った時の部長である。

「あまり絵の印象はないんです。それぞれ自分のやりたいことを自由にやってみましたから。学年に関係なく、みんな

仲が良く、楽しかったですね」

卒業後も交流は続いている。先輩からかわいがられ、同級生から親しまれる坂井さんの気さくで誠実な人柄が、アートディレクターとして成功した要因のひとつなのだろうと、取材していて思った。

坂井さんにはさらなる目標がある。アーティストとして自分の作品を創作すること。グラフィックデザイナーからイラストレーター、さらに世界的な画家へと転身した横尾忠則という偉大な先達がいる。そのため、二〇〇一年に京都造形大学油絵科に入学。人物の素描（クロッキー）などの練習も継続している。近い将来、画家・坂井智明の個展が開催されるかもしれない。

新・図書館員ノート「思い出の一冊」⑨

けんかするけど、なかはいい



子どもの頃、クリスマスにはサンタさんがプレゼントを置いてくれた。本よりおもちゃが多かったのは、きっと私にとって本が身近なものだったからだろう。

絵本や読み物・図鑑いろいろな本を両親は揃えてくれた。私たちが読みたいと思った本だけでなく、両親が気に入っていたものも多い。その中でも絵本の「いもうとのにゆういん」（筒井頼子／さく、林明子／え、福音館書店）は何度も読んだ。

妹が突然入院し、ひとり留守番をすることになったあさえが、よりお姉ちゃんらしく成長するお話で、お見舞いの手紙とかわいらしい紙に包んだプレゼントを受け取る妹が本当にうれしそう、ちよつと成長したあさえの照れた表情も良い。けんかをしてもらいたくはない、そんなきょうだいの良さを感じさせてくれる。

私には男兄弟しかいないが、「もし兄弟が入院したらどうしよう」「何を持って行こう」と真剣に考え、おもちゃを包む練習もした。

幸い兄弟が入院することはなく、おもちゃを包んだお見舞いも出番はなかったが、喜ぶ顔が見たいとプレゼントをすることが好きになったのも、この絵本の影響かもしれない。

そういえば、兄弟にクリスマスプレゼントを贈ったことはなかった。かわい紙を準備して、今年は自分で包んだプレゼントを渡してみようかな。

（三次市立図書館員によるリレーエッセイ、執筆者の似顔絵は有光館長作）

宮本常一『家郷の訓』

村をゆかしく点描する

戦前の村は、因習に囲まれ暗く、貧しいと思ひ込んでいましたが、民俗学者宮本常一の『家郷（かきょう）の訓（おしえ）』（三国書房、43年刊）は、村は貧しいながら平和で、まるで心の桃源郷のように点描して見せました。伝統行事や民話・民具の平板な記録になり勝ちな民俗学に、人の息づかいを持ち込み、郷里の「村物語」としても目をひきました。

宮本常一は、山口県の周防大島の貧しい農家に生まれ、小学校教師をした後、民俗学に魅せられて瀬戸内海の島々をはじめ全国の地方を歩きました。この作品は、郷里の思い出を克明に描いたものです。

狙いは、自分の村では、子どもの賤（しつけ）はどのようなものかを描こうとしたのですが、そこにとどまりませんでした。

まず、子どもの賤については自分の経験として、幼少時は祖父母に預けられ、学齢期になると母親の手に戻され、成人してからは父親について農業の業（わざ）を少しずつ学んだ様子が描かれています。

次の狙いは、「よき家人よき村人となるための教育が、村里生活内においてどれほどの位置と面積を占めて

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

また読んでみたい本③③

青年たちに

音谷 健郎



【岩波文庫版の表紙】

第33回は、宮本常一の『家郷の訓』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

——。「何よりも村の風をよく理解してこれに従う」というものです。一見、個性をなくすように見えるけれども、むしろ個性が生かされるというのです。実際に、村人は共通のものを持ちつつ、十人集まって見れば十人十色（といろ）だったという。「村人と

とでした。ところが、明治、大正ころから立身出世主義が農村にも入り、大きく変貌したという。幸福の基準が混迷し、村落の生活の自信を失なったのです。後進の指導も投げやりになっていったとのこと。とはいえ、村の共同生活は、多くの「講」による親睦や仕事の協力、葬祭の共同で成り立っていました。村の中の男女の関係は非常に親しいものでありつつ、相当に嚴重だった。それは、若者組、娘仲間の団としての統制の力だったとしています。

ついでながら、方言が中央から排斥されても村には根強く生き残っている理由について、1つには、標準語では村里生活のこまやかな感情表現ができないこと。2つには、標準語は形容詞が貧弱で、表現が露骨になりやすいことを挙げています。

ただ、宮本は16歳で郷里を離れ長く他郷暮らしをしたので、思い出が望郷となり、甘味になってはいまいかと危惧します。とはいえ、「封建的な因習」の吹き溜まりのようにいわれた戦前の村を、違う角度で温かく見た功績は大きいと思います。

今回は、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波文庫）です。

いるか」を探ることです。男は15歳になると「若連中」に入り様々な行事をこなすことで、娘は娘仲間を作り「娘宿」で夜業（よなべ）や物見・参拝するなかで、知らず知らず村の伝統と慣行を身につけます。では、宮本の描いたよき村人とは

してはそういうことを知りつくしていないと新しい改革も新風の移入も、もとは出来難かった」と。その結果、幸福とは単に産をなすことではなく、「共に喜び共に泣き得る人たちを持つこと」なのでした。それによって「孤独を感じない」こ

死者人形タウタウ

——死者が身近な死生観

音谷健郎

ただ、岩壁の広さには限りがあるので、有力者の家族だけのようでした。レモ村ではこのような墓を3カ所めぐりました。高い場所にあるので、細かい表情は撮った写真を引き伸ばして始めて知り、そのリアルさに感動しました。

もう一つ、死者の送りで驚いたのは大木葬です。といって死者を樹木のそばに埋めるのではなく、樹木の中に埋めるのです。

岩窟墓から遠くないところに案内されました。大人が数人でやつとの大木の幹周りに、画用紙大の継ぎを当てたような箇所がありました。数えると10カ所ほど。まだ菌の生えない幼児の亡きがらを、木をくりぬいて埋めた痕なのです。埋めて木でふたをしたのです。

インドネシア・スラウエシ島のタナ・トラジャ地方で、さらに目をひいたのは人形タウタウの生き生きとした表情でした(写真Ⅱ左下)。タウタウとは、亡くなった人を偲(しの)ぶ木彫りの人形です。トラジャ地方の中心都市ランテパオの南10キロ、レモ村に多く残っていました。岩窟墓(写真Ⅱ左上)といわれる高い岩壁の途中に横穴を掘った墓に据えられていました。生前を思わず衣装をまとい、天に向かって手を差し出し、目を見開いてたたずんでいます。等身大より少し小さく見えました。人形は家族を見守り、家族はここに来れば、いつでも生前の姿に見えるのです。



この木は、リアン・ピン(赤ちゃんの穴)といってタラ科の木。白い樹液を出すので、幼児は母乳の替わりに飲み、木と共に育つという信仰なのです。

他に、家の庭に埋めて身近に死者を弔う方法もあるそうです。ハンモックのように宙づりのままミイラになる葬られ方もあると聞きました。

石の洞窟を墓所にしていて、ところも訪ねました。木や石の棺の他に、

死者を直に安置していました。死者の服の色は脱色されていましたが、顔は少し萎(しな)びている程度でした。乾燥してほぼミイラ状態になっていました。ここでは、死者にまるごと会えるのです。乾燥した気候状況が、これらのことを可能にしているのだと推測しました。

どの場合でも死者が常に身近にいて、あたかも共に暮らしているようなスタイルです。死者をはばかりて遠ざける日本の慣習、つまり生者が自分の身に塩をふりかけて清めたりするのは真反対なのです。この地方に生き残るアルック・ト・ドロ(先祖のやり方)教という伝統的な精霊信仰に支えられているのです。

死生観のこの違いはどこから来るのでしょうか。いろいろ頭をめぐらすのですが、正確な事情がつかめないのが宿題として持ち返りました。

人口2億6千万人。ちょうど日本の2倍です。農業大国として自立しているインドネシアには、特色ある伝統文化が各地に見られます。日本では、欧米の尺度で文化を測りがちですが、ここには「土」に根ざした文化が残り、興味が尽きませんでした。

旧三上郡三十三か所霊場③

ふるさとへの巡礼地を訪ねて

第七番札所 上谷時貞寺ときさだじ

いつのよぞ麓のちりや積りけり中
にすぐれて高きあふ山

(いつの世からのものであろうか俗世の汚れたちりがこの地にうず高く積もってしまった。そのちりの中に立派な高い山がそびえ立っている。それは仏法の教えを示す尊い山なのである。)

所在地は庄原市上谷町、御詠歌の額面や寺院は存在しない。時貞寺があったと推測される場所に、上谷歴史研究会の藤川廣明さん、上田輝馬さんに案内してもらった。上田さんは、「旧三上郡三十三か所霊場探訪記」(一九八三年発行、以下探訪記と略称)を編纂したふるさと研究会のメンバーだった人だ。

上谷コミュニティセンター(旧上谷小学校)から市道を登って行くと、六番札所の上河内堂が沿道にある。さらに進むと不老仙神社に到達する。地元の和太鼓グループ「不老仙太鼓」に、その名前が刻まれている。



神社の手前の林道に、車で乗り入れたが、今年の豪雨による山崩れで寸断されていた。仕方なく神社に戻って、境内を通過、その先の林道を一キロばかり登ったところに田辺宅がある。現在は無住というが、家の前の畑はきれいに整備され、いろんな野菜が栽培されていた。谷を見下ろす眺望が清々しい。

「あそこに竹林があるでしょう?」

藤川さんが指さした場所を見ると、

深緑の山林の中に、楕円状の黄緑色のエリアが存在する。野生では竹林は育たないので、人の手が入った証拠だという。その竹林を目指して、かつては田んぼだった段々の台地を下った。

山林に分け入って、沢を渡った。山腹にたくさんの石垣がある。すべり、棚田の跡だという。棚田を作るときは、水源地に近い山の上の方から田んぼを作るのだと教えてもらった。道なき山行も、石垣のおかげで足場を確保できた。

灌木や植林が途切れた場所に、三坪ばかりの平地がある。傾いた石の

台座の上に、庚申塔がある。その左手の少し離れた場所に、二体の馬頭観音の石仏が安置されている。田辺宅から十五分ほどで目的地に到着。

「近くに住む平山国夫氏(七九歳)の話では、十数年前までは堂も立っており、確かに『七番…時貞寺』と書かれた額が懸っていた由である。昔はお盆の七日に地区の者が集まって念仏を唱えていたそうである。」(探訪記)

庚申信仰は、道教や仏教、神道や民間の風俗などが複雑に絡み合った複合信仰で、江戸時代に最盛期を迎えた。一般に庚申塔は街道の峠の出入口に安置されていて、時貞寺の跡地も、本村への山越え峠の入口に当たる場所らしい。

「普通の庚申塔は、怒った顔をした一面六臂の青面金剛夜叉明王に、上部左右に日・月、下部に二鶏三猿を配しているのですが、この塔は一面四臂、二鶏二猿で月日が無い。顔は実におだやかです……」

上田さんの解説を聞きながら、郷土史の魅力を堪能した。

時貞寺があったと推測される場所に立つ庚申塔(写真上)と馬頭観音の石仏(写真下)

虫と草木と人びとと②① 中村慎吾 「風土記時代の中国山地の植物・その四」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

中国山地の北面を占めている飯(くすのき・クス)、椎(しい・スダ石・仁多両郡から記録されている植(ジイ)、楊梅(ヤマモモ)は温帯の樹物は重複している十五種をふくめ、木で現在は島根半島など出雲地方の延べてみると五十三種に達する。楠 沿岸部に見られる。これらの樹木が



比婆山連峰の原生林 (小川光昭撮影)

飯石郡から記録されているが、これらは中国山地の飯石郡側に広く分布していたとは考えられない。これらの樹木は神門郡・出雲郡・大原郡に隣接する低標高の山地・原野に分布していたものである。同じ暖帯系の樹木である樺(かし・シラカシとアラカシに同定されている)は飯石郡にも分布していたであろうが、仁多郡に限って記録されている。現在、カシ類は川ぞいに分布を広げ低標高の地

ではアラカシが多く、標高が高くなるにつれてシラカシに替わっているが、仁多郡の場合、恐らくカシ類の分布は当時も今とあまり変わらない分布様式を示していたことであろう。両郡から記録されている樹木のうち暖帯系のもは楠・樺・楊梅・椎の四種だけで、残る樹木は温帯林―夏緑落葉広葉樹林を構成しているものである。飯石郡から記録されている榎(ハルニレ)は現在、吾妻山の標高千メートルあたりによく残り、吾妻山から以西、猿政山・大万木山(おおよろぎさん)・女亀山にかけて高標高のところに点々と見られ、大万木山塊ではオヨウニレも見られる。栗は広くブナ帯一部に多く、その落葉広葉樹林には両郡から記録されている薬(キハダ)、飯石郡から記録されている秦皮(とねりこのき・トネリコに当てているが、中国山地のものはコバノトネリコなので小文ではコ

バノトネリコとする)が広く分布している。また、記録されている草本も附子(ぶし・ヤマトリカブト)、薺(さきくさな・ソバナ)のように夏緑広葉樹林の林床や高標高の原野に生えているものが多く、五十三種の植物の中で女萎(えみくさ)や升麻(とりのあしくさ)などのように同定に異論があつて、正確にどの植物を指しているのかはつきりしないものもあるが、例え、女萎がボタンズル(キツネノボタン科)とされようとアマドコロ(ユリ科)とされようと、いずれにせよ中国山地に広く分布している植物なので、中国山地は広く夏緑落葉広葉樹林が茂り、その下部はところによって人手によつてかく乱された二次林、川沿いに暖地系の植物が入っていたものと推定され、大筋は今の植生とあまり違いはなく、今よりは多くの大型哺乳類の生息を許すことのできた原生

の趣のまだ濃厚な生物的自然がひろがっていたと推定される。

仁多郡から備後国へ越える峠の記事の中に、随所に「監味葛（えびかずら）多し」という記述が見られる。今、これらの峠を越えると道傍にヤマブドウが多い。監味葛をエビヅルとヤマブドウの二種に当てているが、峠を越えるところではヤマブドウが多く、エビヅルは極めて少ない。ブドウの栽培は十三世紀の初め、甲府で始まったといわれているから、風土記が成立した頃、出雲国でブドウは中国山地に自生する野生のもの

を採取し、食用としたものであろう。サンカクヅル（ギョウジャノミズ）

もヤマブドウに混じって中国山地に見られるが、果実のひとつまわりも大きいヤマブドウを古代の仁多郡の人びとは恐らく珍重したことであろう。ヤマブドウの実る頃、ムラビトは山をかきわけて実をとり、また、峠を越える人びとはその実で渴を癒したことであろう。千年を経た今日、峠でヤマブドウの茂みを見るにつけ、深い感慨を覚えると共に自然の永遠性に畏敬の思いをいたす。



ヤマブドウ
(フリー百科事典「ウイキペディア」から転載)

老いの雑記帳⑩

あいづち

人との付き合いで特に留意しなければならぬのは『挨拶・笑顔・あいづち』の三要素だと言った人がいる。

挨拶は努力しなくても誰でも普通にできる。笑顔は相手に好意さえ持っていれば、自然に表情に出るものだ。しかし、あいづちを打つとなるとそんなに簡単なものではない。

人との付き合いにも色々あって、近隣の人、家族、親戚、同級会や同好会等の会の仲間、飲

み屋で知り合った人、昔からの知人友人等々種々雑多である。そうした全ての人に『挨拶・笑顔・あいづち』が出来る人は滅多にいない——と私は思う。

三要素の中で最も実行が難しいのは『あいづち』だと思う。人との会話や対話の途中で、相手の話を遮り「だけどねえー」とか「でもねえー」なんて言葉を吐き、自分の意見を押し付けようとする人が多いからだ。

『あいづちを打つ』ということは相手への思い遣りがあるということなのだ。先ず相手の意見を最後まで聞き、「そうだよ」と一応納得した形の後で自分の考えがあればそれを言えたいのだ。相手への思い遣りが無い人が自分を前面に押し出すのだ。そんな相手とは二度と話をしたくなくなる。しかし、その相手が同居の家族だったら悲劇だ。会話の無くなった沈黙の家族は、もはや家庭とは言えないからだ。

「思いのままにく我が心の雑記帳」(鈴木澄夫著)より



「お金はいりません。本を引き取ってもらえればいいんです。捨てるのはしのびないですから」

電話の声は、少し苛立っているようだった。買い取り金額が低いことを強調し過ぎたようだ。高齢者の多い過疎地なので、古本を買うよりも処分したい人の方が圧倒的に多い。店内の棚はもちろん、書庫に使っている部屋からも未整理本が溢れだして、仕方なく階段の片側に段ボール箱を積み上げている。

ひそかに三重苦と呼んでいる本がある。百科事典や美術全集、文学全集などの大型本だ。重い、安い、売れない。応接間のインテリアとして販売されたような豪華本は、引き取っても並べる場所がないので、処理に苦吟することになる。

あべせつこの名前と住所を書きとって、今日の午後一時の訪問を約束した。急いでいるようだった。定休日の月曜日だったのが幸いした。

川沿いの県道を進んで、砂利道の私道を上がった突き当りが、彼女が言った住所の家だった。木造モルタルの古い二階家、これが茅葺の古民家ならば、都会の物好きが移住したと思うかもしれない。街の中心部

でも、空き家がどんどん増えているのが実情だった。

白い割烹着を着た依頼主が、玄関のドアの前に立って待っていた。白髪の多い銀髪が、上品なショートにカットされている。年齢は七十前後か。かなり背が高い。車が見当たらないので、ここまでタクシーで来たのだろうか。

「やっぱり寒いね」

「古本夢譚」

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ③1

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

それが最初の言葉だった。まったくですとわたしは同意した。師走に入って一週間、そろそろ積雪に備えて、冬用のスタットレスタイヤに履き替える時期にきている。県北の冬は、うんざりするほど長いのだ。

「母方の実家なんだけどね。中学生の頃、半年だけここで暮らしたことがあるの」

最初に案内されたのが、八畳ほど

の居間だった。電灯が点かないので、カーテンを全部、開いていたが、少し薄暗い。硝子戸の入った本棚に、「芸藩通史」という背表紙を認めて心が躍った。広島藩が編纂した地誌で、郷土史の貴重な資料になっている。

（昭和四十年代に再版した本だな）
全五巻のはずだが、二冊しかない。それでも二冊で一万円で売れるな、などと皮算用をした。ちゃんと査定

してある。裏表紙の裏に貼られた紙袋には、貸出カードが差し込まれたままだった。

パソコンが普及する前は、貸出カードで本の管理をしていた。本が借りたときは、自分で貸出カードに名前と日付を書いて、それを図書室で保管する。本が返却されたら、職員が貸出カードに返却日の日付を記入して、元通りに本の袋に差し込んで棚に返した。

「小山内節子さん？」

貸出カードに書かれていた名前だった。彼女が怪訝な顔をした。

「中学校の同級生？ いや、そんな年齢にはとても見えないわ」
わたしの顔を見ながら言った。

「堀江辰也さんは？」

「この中学に通っていた頃の同級生よ」

「図書室の委員をしていた？」

「そう、図書委員だった堀江君」

それを聞いて、わだかまっていた疑問がすべて氷解したような気がした。

貸出カードには、小山内節子の名前がずらりと並んでいる。この本が気に入って、何度も何度も借りたのだ。しかし、彼女の家には、堀江雄



の『風立ちぬ』がすでに本棚にあったのだ。どうして、家にある本を学校の図書室で何度も借りたのか？

「図書室に理由があったのではないか？ 今はどうか知らないが、昔の中学校は図書室に職員を常駐させる余裕がなくて、生徒の中から図書委員を選んで補佐させていた。放課後は、図書委員が職員の仕事を代行することも多かった。彼女は堀江君に会うのが目的だったのではなかったか？」

「ちよつと待っていてくださいいね。」

渡したい本があるんです」
車で店まで引き返した。

「懐かしいわね。もう五十年以上も前に借りていた本なのに、あの当時のままのような気がする」

「それだけ大切に保管されていたのだ。彼女は本を慈しむように、優しくページをめくった。少女のように目が輝いている。」

「病気の婚約者に最後まで尽くす主人公に憧れたの」

「結核で軽井沢のサナトリウムに入院した女性と、その婚約者の純愛の物語だ。」

「美人薄命と言うけど、あたしはこんなお婆ちゃんになるまで生きてしまった……」

小説に出てくる女性の名前が、彼女と同じ節子なのだ。

貸出カードの最後には、堀江辰也の名前が書かれていた。几帳面な字だった。彼はたぶん、この本の貸出期間中に、同じ本を懸命に探したのではなかったか。転校して行った小山内節子が好きだったこの本を、どうしても自分のものにしたかった。

こっそりと新しい本と入れ替えたのか、あるいは、失くしたと言って自分の購入した本を差し出したのか。

貸出カードの返却日は、空欄のままだった。

「で、堀江君は元気なの？」

「答えなかった。答えられなかった。おそらく、亡くなっている。そうでなければ、この本を手放すことはなかったはずだ。」

「大嫌いだっただのよね。どうしてこんな山奥の田舎で暮らさなければいけないのかと、母親にも食ってかかったわ。半年で出て行ったときは清々した……」

しばらく考えていた。

「悪いけど、今回の話はキャンセルさせてくれない」

「エツとわたしは、彼女の顔を見た。ここに住んでみようかな。どうせ独り暮らしなんだから、ごみごみした都会で暮らすことはないものね」

芸藩通史のことが頭をよぎったが、何も言わずにわたしは頷いた。

車に乗り込んで、帰ろうとしたときだった。

「ねえ、『風と共に去りぬ』は置いてる？」

声をかけられた。

「ありますよ」

笑顔で答えた。歳をとってからの田舎暮らしは、スカーレット・オハラが強さが必要だ。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL: 090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「知識人 99 人の死に方」

荒俣宏 監修 角川ソフィア文庫

戦後に亡くなった知識人の「死にざまのドキュメント」。手塚治虫は60歳で胃がんで斃れた。自分が漫画の神様の享年に達していることに嘆息した。「仕事をさせてくれ」が最後の言葉だったという。膨大な仕事を抱えて、最後まで現役の漫画家だった。肝硬変で47歳で死んだ寺山修司は、「60歳まで生かしてくれ」と主治医に懇願していた。病に恐怖しながらも、入院を頑なに拒んで、時代の寵児であり続けた。



利己主義の権化、永井荷風は、たったひとりで生きたいように生き、大金を貯め込んだまま孤独死した。稲垣足穂はロクデナシの人生を最後まで全うした。死にざまは、生きざまでもある。さて、自分は……。

「戦雲の夢」

司馬遼太郎 著 講談社

長曾我部右衛門太郎盛親、四国の土佐 22 万石の御曹司である。豪胆で眉目秀麗、男でもほれぼれする若武者ぶりだが、ただ一つ欠点がある。欲がないのだ。四国を平定した猛将、長曾我部元親の後継者だが、権力にも女にも執着は薄い。関ヶ原の合戦で豊臣方に組した長曾我部家は領地を没収され、盛親は牢人の身分に墜ちる。屈辱的な処遇だが、盛親は開放感を覚える――。



その後の大坂冬の陣、夏の陣で、真田幸村と共に牢人大名として盛親は勇名を馳せるのだが、盛親自身、勝算がないことは百も承知。戦国大名の悲劇ではなく歴史ロマン、エンターティナーとしての司馬遼太郎の本領発揮である。

「パイの物語」

ヤン・マーテル 著 竹書房

イギリスの権威ある文学賞、ブッカー賞の2002年受賞作。「ライフ・オブ・パイ/トラと漂流した227日」という題名で映画化。沈没した貨物船の狭い救命ボートの中で、16歳のパイ・パティはベンガル虎と一緒に漂流することになる。私設の動物園を経営していた実家での経験や知識が奇跡を生んだ？



前半部分でパイの生い立ちが綴られているが、並外れた信仰心が興味深い。パイ少年は敬虔なクリスチャンであり、毎日コーランを唱えて礼拝し、ヒンドゥーの神々を信じている。彼の中では、三つの宗教が矛盾なく同居している。最後の章でファンタジーの煙幕が消失、その解釈は読者に委ねられている。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇

借景の大富山の初時雨

近藤 昌平

冬の虫繁華街中駐車場

竹地 恵美

かいつむり吾に浮く湖なかりけり

原 博己

中天へ見逃しそうな朝の月

片岡 正人

廃屋の侘助の白淋しけれ

隆 愚

釣瓶落し広場に僕と空缶と

大槇 三代子

投稿&寄稿

「ゴーン氏逮捕」 M・A

ニュースを見て驚きました。もう二十年近くも前のことだが、経営危機の日産自動車に、提携先のルノーから乗り込んで来たカルロス・ゴーン氏の記者会見を、今でも鮮明に憶

えている。たどたどしい日本語だったが、現地の言葉で自分の想いを伝えようとすると姿に好感を覚えた。当時のゴーン氏はまだ四十代の半ば、年功序列の日本社会では考えられなかった人事で、グローバル化という言葉を実感させられた。日本人のメンタリティにはそぐわないと言われたリストラを断行、徹

※投句を歓迎します。

底的に無駄を省くという合理化で、日産の業績をV字回復させた。その手腕が認められて、フランスのルノー社でも社長に昇格。日産の社長との兼務で、そんなことが可能なかと驚かされた。逮捕時の肩書は、ルノー、日産、三菱自動車、各三社の取締役会長、さらに「ルノー・日産・三菱自動車連合」の社長兼最高経営責任者（CEO）をも兼務している。容疑は脱税で、役員報酬を五十億円余り少なく申請していたらしい。期間は2011年から15年で、その期間の役員報酬は約百億円。一年平均で約二十億円、庶民感覚ではとんでもない金額だが、最大三兆円近くもあったという日産の負債を完済してくれた辣腕経営者の報酬、と考えれば納得である。人格が優れた人物でも、経営の才覚がなければ、社員は路頭に迷うことになる。日本の会社の役員報酬で過去最高額は、ソフトバンク元副社長のニケシユ・アローラ氏の百三億四千六百万円（2017年）である。

新聞記事によると、日産の内部告発があったらしい。業績好調の日産に較べて、ルノーは販売が低迷、かつての立場は逆転している。ルノーの筆頭株主であるフランス政府の意向を受けて、ゴーン氏はルノーと日産の合併を画策していたという。それに反発した日産サイドが自爆テロで自分の首を切り落とした。後継者はいらぬのか？ 企業のイメージダウンは必至で、乗り切ることが出来るのだろうか。平家物語の有名な一節を思い浮かべた。「驕れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」。盛者必衰の理（ことわり）、なのである。



Dora Topix

「三日市張り子十二支展」 ——古本とアートのコラボレーション——

展示会場：どら書房 期間：12月1日(土)～9日(日)

郷土玩具が大好き。

でも、どんどん廃絶していく作品たち。
そんな想いから始めた張り子づくり
気付けば十二支が揃いました。

期間中、どら書房さんの店内のどこかに
十二支の張り子を展示しています。

「どこかな？」とみつけてみてください。

小山 みわ



最終日に「読書会」を開催します。

会場：どら書房漫画ルーム 日時：12月9日(日) 14時～15時30分

参加費：300円 (本格コーヒーとお茶菓子つき)

主催：「しょうばらで読書会がしたい会」(小山みわ)

各自好きな本を持ち寄って、「この本が好きな理由」や「この本に出逢って」等々、本についての想いを気軽におしゃべりしませんか？ お気に入りの本、2冊ぐらいを持って、ご参加ください。



※地元風景を撮影したポストカードも販売しています。

風景絵ハガキ(二枚百円)、
どら書房で販売中！

還暦を迎え勤めをやめ、今年から実家に入りました。農家ですが、今はわずかばかりの稲作で、一年中、これにかかわる事も無く、ゆとりのある時を送る様になり、ずつと好きだった絵を約一年描いてきました。

郷土の自然や風物など、改めて見つめると、絵にとどめたいものがたくさんあり、機会を見て描いています。時には、遠く県外にも足を運びます。

ただ、心のおもむくままに絵を描いて楽しんでいる存在に過ぎませんが、雑誌やパンフレットで紹介されることも無い場所でも感動できる景色がたくさんあります。

もし、ご覧くださって、少しでも共感して頂ける方がいらつしやいましたら、嬉しい限りです。(上田智暢)

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

— 硬式テニス参加者募集 —

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

- ・火曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・水曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



「しょうばら九日市」の歳の市&骨董まつり

12月9日(日) 9:00 ~ 13:00 会場&問い合わせ先は裏面の地図を参照。

- ① 酒蔵トーク「古美術骨董を楽しむ—骨董よもやま話」(楽笑座)
講師：広島骨董ひつじ堂
- イベント (10:00 ~ 12:00) ② チャリティオークション (楽笑座、または特設会場)
「ありそうでなかった骨董まつり」 熊本洋道の「あるぞお宝！ もってけオークション!!」
- ③ 県立広島大学「Wind Orchestra」(まちなか広場)
- ④ 神楽「大黒舞」「歳の市福まき」(まちなか広場)

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター(現地記者)募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

— 絵本の無料レンタル —

イベントや集会の時などにお使いください。

「箱貸し」します。

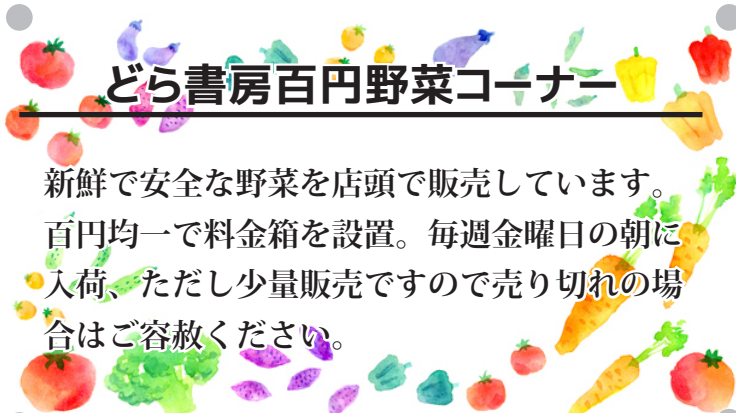
図書館の除籍本や販売には難のある本ばかりなので、破損しても大丈夫です。

ご希望の方はどら書房まで。

どら書房百円野菜コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売しています。

百円均一で料金箱を設置。毎週金曜日の朝に入荷、ただし少量販売です。売り切れの場合はご容赦ください。



編集後記

◇ 東北群星伝に登場していたいただいた坂井智明さん、東北在住ではない人を取り上げるのは初めてです。スケールの大きな話を聞かせていただきました。

◇ 音谷さんのインドネシア異文化紀行は今回で最終回。現地に行つてのルポは、やはり臨場感&迫力があります。またの機会があることを願っています。

◇ 日本シリーズは残念でした。サツカーのサンフレッツチェと共に、来年こそ日本一になって、一緒に優勝パレードをしてほしいですね。

◇ いよいよ師走に突入、寒くなりまししたね。店の石油ストーブをそろそろ出さなくては。ストーブの上で作る焼きイモが楽しみです。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@sannet.ne.jp

年間購読料：2,000円(郵送料込)

誌面デザイン: ROUTE183

協賛：九日市愛好会

第 215回

「庄原九日市」

平成30年

12月9日 (日) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）。
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

TOPICS

- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」
→わら細作品展・高齢者手作り品展
とき：12月8(土)～10日(月) 10時～16時
- ★どら書房
→九日市の日には営業します。
月曜日と火曜日はお休み。

- ★風龍
→九日市スペシャル！餃子200円！
- ★楽笑座でイベント開催中！！
- ★初登場！！庄原ジビエ工房
絶品「いのししウイナー」「いのしし汁」
- ★総領ひょうたんクラブの「研ぎ屋」さん登場！

出店配置図



- 2 タラワーフード 越中芋騒動
- 3 昭助 とらぢ 二八そば加工所 アーミッシュ さだっさ 佐藤食販 健康企画グループ
- 4 郷屋 めくもり 832gの奇跡
- 5 ちくちくはうす玉手箱 工房アム かぐや姫 リサイクル (骨董)
- 6 Room of Keiko めだかの学校 いせや (骨董)
- 7 農楽会
- 8 タツミ矢 開盛社 くわちゃん家 アパレルゴトー ひょうたんクラブ (刃物研ぎ)
- 10 克國水産
- 11 庄原ジビエ工房
- 12 どら書房 (骨董)
- 13 山本水産 くんえん工房 香豚 ハナビラタケ広島
- 14 まなべ商事
- 15 田崎屋 (骨董) 砂田海産 佐藤園芸 珈琲屋スプレモ 宮川屋 ネコのあし音
- 16 お福 (骨董) どんぐりーず

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～ 九日市愛好会事務局 〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ <http://www.kunchi-ichi.jp>

